

期待の新品種は中生種戦国時代に割って入れるのか…？！

りんご・もも部会新聞

発行

りんご・もも部会

生産指導部

問い合わせ先

営農センター

TEL 23-3933

初秋を彩るりんご「すわっこ」現地検討会開催される！

去る9月8日（月）に、りんご・もも部会生産指導部主催で、りんご中生種「すわっこ」の現地検討会約50名の参加者の下長丘田麦地区で開催された。

この「すわっこ」は、サンつがるの収穫がひと段落する9月中旬頃に収穫が始まる中生種で、長野県内では標高の高い地域を中心に導入、生産振興が進んでいる。この品種は、昨今顕著になっている晩夏〜初秋の高温下でも着色が容易で、今年のようにお盆過ぎから9月初旬にかけて夜温が下がると、アツと言う間に濃厚な赤色に仕上がる特徴にある。下諏訪町の花岡正憲氏が世界一の自然交雑実生から選抜育成した品種で、濃厚な赤色の他に9月に成熟する品種ではあるが、がくあ部付近に蜜が入るのも特徴である。（下写真参照）

現地検討会会場である、田麦長張昭雄氏では、平成

21年春にマルバ付き苗木定植して、今年で6年目。すでに園地内が埋まっており、6年目とは思えない着果量が確保されており、早期の生産性の良さも覗えた。また、8月下旬から濃厚な赤色に仕上がっており、長丘バイパス通りにあることも手伝って、道行く人の目をくぎ付けにしている。当日は、収穫直後の果実の試食も行い、蜜入りや独特の食味・芳香も楽しむことができた。参加者から導入の経過を問われた長張氏は、「新聞等で情報を得て、すわっこ品種に関心を持ち直観で導入を決めた。」と答えた。また、「着色が良好なだけに未熟果の収穫だけは行わないように注意している」とも語った。加えて、炭そ病が発生し易いため、梅雨期間の防除は特に注意する必要があるとの助言もあった。

すわっこ導入に関心を持つ検討会参加者からは様々な質問が出されたが、特に多かったのは、蜜入りや収穫時期のことであった。

蜜入りに関しては、全ての果実に入るとは言い切れないものの、9月上旬中に夜温が下がり、気温の日較差があれば、ある程度の蜜入りは期待できる。また、収穫時期は標高や栽培地の排水性等で差が出るが、着色が良いからと言って、あまりにも早い時期に収穫を行ってしまうと、果肉内に多くの渋みが残る、本来の食味を損なってしまうことがあるので、一挙総収穫は避け、着色と食味等を総合して2〜3回に分けて収穫を行うことが望ましい。加えて、天敵である炭そ病対策は、主に梅雨後半から8月上旬頃に果実へ感染することが多いので、梅雨後半のキャプタン剤の特別散布は確実に実施する必要がある。

部会長の畔上慶一氏は、「近年様々な中生種りんごがあり、どの品種を導入するか悩むところだが、生産性や栽培地の適正を加味したうえで、すわっこを試験的に導入してみたい」と語った。

部会長の言葉通り、県内外で温暖化や生産性の良い多くの中生種が存在するが、中野市として、どの品種が適合するかは、今回検討したすわっこを含めて、試験的に栽培を行ってみて判断する必要があると感じた。果たして、このすわっこは中生種戦国時代に割って入れるのかを今後注目したい。

（記事…指導部長高野広信）



平成 21 年定植。今年で 6 年目



着色は縞が不明瞭で濃赤色



果形は扁平型も多い

～お知らせ～

話題の百年ふじ現地検討会の開催

- 日時：10月20日（月）
- 集合場所・時間：午前11時・午後3時
ともに高社共選所前
- 会場：越 荻原安治氏園
- 内容：品種特性・試食検討・現地見学
他

現地検討会場は長丘バイパス道路沿いであり、9月初旬には濃厚な赤色に仕上がりと、他のりんごに比べても目立つ。



←写真：現地検討会

写真中央は、多くの参加者の前で導入の経過や栽培上のポイントを語る長張昭雄氏。質問が多く、有意義な検討になった。